

友史会 2024年7月 講座例会

令和6年7月21日(日) 13:00~16:30 榎原考古学研究所講堂

・「塩の生産と流通—古墳時代の近畿地域を中心に—」

(講師) 岩崎 郁実 (調査課主任技師)

・「文字のはじまりと奈良墨」

(講師) 岡見 知紀 (調査課主任研究員)

(感想文)

7月の下旬、酷暑のもと「歩く例会」は厳しいとの考えから、今回は若手の先生お二人の研究テーマからの講演会で、約100名の友史会会員の参加となりました。

冒頭は司会から、昨年暑い7月の歩く例会の経験談を交えて、研究所講堂での講演会となったことへの説明とともに、友史会の田中会長から挨拶がありました。

最初の講演は、入所3年目の岩崎郁実主任技師による「塩の生産と流通—古墳時代の近畿地域を中心に—」。各地の遺跡には塩そのものはもちろん残っておらず、発掘された「製塩土器」の考古学的な研究によって、古代からの塩の生産を古墳時代の近畿地域を中心に論じられました。特に製塩土器の研究は1954年に香川県喜兵衛島で発見されたのがはじまりで今年70周年とのこと。以後、各地の遺跡発掘に伴い、製塩土器が沿岸部ばかりでなく内陸部でも現れ、しかも古墳時代中期では、おおよそ100ccの容量となっていることなどが興味深く感じられました。数々の製塩が自家消費の小規模な範囲から拠点化、大規模化され、運搬、流通へと発展していくことが説明されました。

岩崎先生は、このような塩の生産と流通からみて、近畿地域全体を統括する王権の介在を想定し、今後も研究を続けられています。



後半のご講演は、入所13年目の岡見知紀主任研究員の「文字のはじまりと奈良墨」。

岡見先生の「文字と墨」研究は、東大寺旧境内の調査時の遺物から、墨に関心を持たれたのがきっかけだそうです。墨字はそう簡単に消えることはなく残り続けます。その点で、木簡などの墨字の資料が古代史研究の大きな材料となっていることは言うまでもありません。

墨の国内生産は、8世紀頃から官営で始まり、平安時代末には寺院(特に興福寺)での製造、近世には町人墨工(特に奈良町)と、奈良墨が古代から現代まで引き継がれていることを教えられました。

特に岡見先生が力点を置かれたのは、弥生時代の硯問題です。全国で「板石硯」とされるものが発見されていますが、硯台、研石等の共伴、墨の付着が確認できることが認定基準と考えられ、未確認とのこと。今後、墨書土器や硯に付着した墨の研究を中国、韓国、

ベトナムの研究者と取り組んで行かれます。



今回の講座では、塩、墨という日常の生活、文化に必須のものに焦点をあて、古代史を  
探る視座を学ぶことができました。また、製塩土器や墨、硯など、ともすれば素通りしが  
ちな常設展示に、いにしえの生活用品がどのようなものであったか、少し立ち止まって観  
覧してみようと思います。岩崎先生、岡見先生、ありがとうございました。

奈良県 島岡 弘行